

Title	ニューデリーにおける図書館の情況
Sub Title	Libraries in New Delhi : their collections and facilities
Author	古川, 学(Hurukawa, Manabu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.2/3 (1990. 7) ,p.145(315)- 160(330)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学会動向
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学界動向

ニューデリーにおける図書館の情況

古川 学

一 はじめに

歴史研究の基礎として最も重要なものは史料収集である。外国史研究の場合、自分のテーマとする史料が日本にないことが多く、現地の図書館・古文書館を限られた時間的制約の中でいかに効率よく利用するかという点に、研究のかなり大きな比重が占められている。

イギリス・ドイツ・アメリカなどの欧米諸国で出版された図書に関しては、各々の国の中央図書館が膨大な蔵書目録を刊行し、日本の国立国会図書館や慶應義塾大学の三田情報センター等に所蔵されているその目録から、出版図書の所在を確認し、ブリテイッシュ・カウンシルを始めとして各々の国の在日文化団体を通じて、その複写

や現物を航空便で僅か数週間の内に入手することが可能である。

中国史に関しては、日本には明治以来培われた東洋史の長い伝統があり、史料についても日本にあるもので大体十分な模様であり、中には既に中国で失われているものが日本に存在する事例も幾つかあり、史料収集のためにわざわざ中国に赴く必要は少ないであろう。

インド史の場合、日本におけるその研究の歴史は戦後始まったといってもよく、インド史と称される著作はこの時期に幾つか出版されている。しかし、黎明期の著作が一個人の超人的な力量によって古代から現代まで扱っていたのに対して、現在では研究の方向はその進化と同時に個別分散化する傾向を示しており、インド史を通史

として著すには、四人の研究者が各々古代・中世・近代・現代を担当することが多い。この理由には、中世・近代の時代にイスラム次いでイギリスの相次ぐ異民族支配を受け、その支配するものが用いた言語が時代と共に大きく変化し、その言語的相違から、サンスクリット語・ペルシア語・英語・ヒンディー語などの史料を利用して研究するに、各々の時代の執筆を委ねなければならぬという事情がある。更に、地域毎に言語の相違もあり、インド史研究は時代と地域との二重の言語による制約を受けている。

日本の図書館の中で、インド史関係の図書を比較的良好揃えているのは、古代は国立国会図書館支部東洋文庫、古代から近代にかけては東京大学東洋文化研究所、近代・現代は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、現代はアジア経済研究所などであるが、それらの図書館に所蔵されている史料は、古代より近代に至るまでの時代に関していえば、研究書を主体とした二次的な史料が多い。

インドの図書館に所蔵されている図書を、日本で閲覧するための便宜は全く行われていない。二次史料・一次史料のいずれにかかわらず、日本に所蔵されていない

史料を閲覧・利用する場合には、欧米の図書館が所蔵する史料を在日外国文化団体を通じて取り寄せることも可能であるが、そのような史料は極めて限られており、より多くの史料収集のためには、やはり直接インドへ赴かねばならない。

インドには数多くの図書館が存在するが、その研究するテーマの時代と地域によって、利用する図書館も自ずから異なってくる。

自身の研究テーマは近代インド史であり、イギリスのインド支配の中で、特に軍事の側面に視点を当てた研究を行っており、史料的には英語を主体とするものである。

一九七九年九月より八四年二月にかけて、ニューデリーのジャワーハルラール・ネルー大学 (Jawaharlal Nehru University) 社会科学部歴史学科に留学した自分にとって、最もよく利用した図書館はインド国立古文書館とネルー記念図書館である。

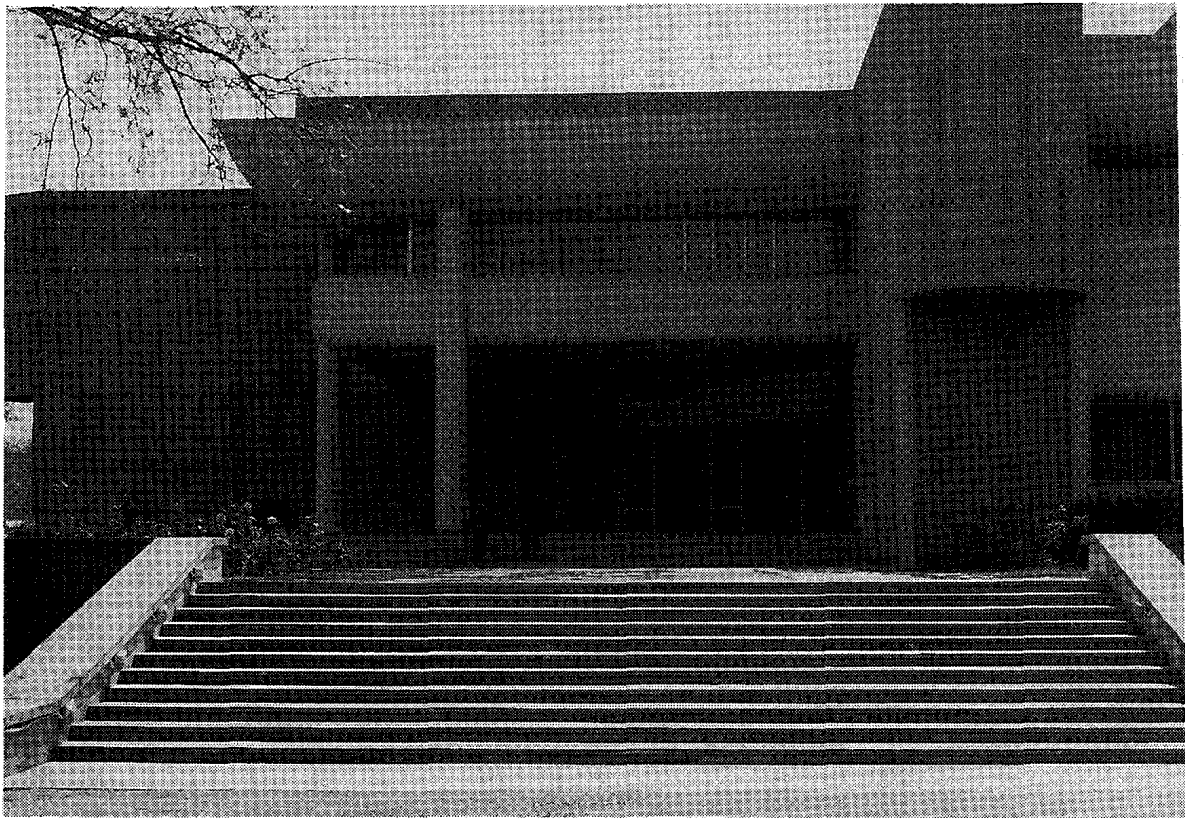
インドの大学には、博士 (Ph.D.) 課程と修士 (M.A.) 課程の中間に M. Phil. というコースが設けられ、修士課程には修士論文が課せられていない。従って、M. Phil. のコースで M. Phil. 論文の指導を受け、一年以

後に提出した M. Phil. 論文審査に合格すると博士課程への進学が認められる。ネルー大学歴史学科では、たとえ外国で修士論文を書いていたとしても、インド人学生と同様に M. Phil. コースに入学させられ、この点ではインドの他の大学よりも一際厳しいようである。

私自身も最初 M. Phil. コースに入学が許可され、バスターチャーリヤ(S. Bhattacharyya)教授とビピン・チャンドラ (Bipin Chandra) 教授の指導の下に、各々別のテーマでターム・ペーパーと称される小論文が課せられた。ビピン・チャンドラ教授の下では、軍事と民族運動との関わりを持つ問題を扱い、ネルー記念図書館に収蔵されている民族運動に関する史料を利用した。

二 ネルー記念図書館

デリーの中心から東南に約四キロメートルの距離に位置するネルー記念博物館・図書館 (Nehru Memorial Museum and Library, Teen Murti House, New Delhi 110011) は、元々は独立前インド総督に次いで第二位の地位にあった総司令官の官邸であったものが、独立後インド初代の首相に就いたジャワールハルラール・ネルー (Jawaharlal Nehru 一八八九〜一九六四) の官邸とな



ネルー記念図書館

り、六四年ネルーの没後その記念博物館として一般に公開され、更に六九年には記念図書館がネルーの娘であるインディラ・ガンディー (Indira Gandhi 一九一七～八四) 元首相によって博物館の隣に建設された。

図書館の外観も内装も極めて近代적であり、内は冷暖房の設備が完備し、百人位が収容可能な館内には、四人掛けの大きな机が数個置かれていた他に、その前部に書架と照明装置の付いた相当立派な個人用の閲覧用机が備えられており、日本の近代的な図書館と同様な快適さが感じられる。

利用手続きは、インドの大学に留学中の場合、その所属する大学の学科長 (Chairman) の紹介状を持参すれば容易に一年間の利用券を発行してくれ、期限が来たときには更にその延長が可能である。インドの大学に在籍せず、日本から訪問して利用する場合には、所属する日本の大学から英文の紹介状を持参すれば、その利用が可能な模様である。

収蔵されている図書十一万冊は全て開架式であり、図書カードも良く整備され、その利用は極めて容易である。但し、館外への貸し出しは行っていない。

複写のサービスは、複写したい史料と共に、その旨を

図書館内にある申込書に記入し提出すれば、一週間程でその複写を受け取ることができる。日本製の複写機が数台備わっており、一枚当りのその料金は、一ルピー (現在の換算率で約十円) 程度である。

図書の利用が非常に便利であるのに対して、二十世紀以降インドで発行された数多くの新聞が、マイクロ・フィルムで収蔵されており、このマイクロ・フィルムの利用にはまだ多くの問題が残されている。

マイクロ・リーダーはアメリカ製の新しいものが七台備えられているが、マハトマ・ガンディー (Mohandas Karanchand Gandhi 一八六九～一九四八) やネルー等に指導された民族運動を研究テーマとする研究者、とりわけネルー大学とデリー大学の博士課程と M. Phil. コースの学生達の利用希望者が多く、朝九時から夜七時までの開館時間のうち、一人一日三時間の利用時間しか割り当てられていない。更に、マイクロ・リーダー内のバルブのフィラメントが切れる故障が多く、破損した場合このバルブの入手が極めて困難なことから、バルブの破損を防止するために一時間につき十五分間リーダーを休憩させることが要求されている。従って、一人が一日に利用できる時間は、実質二時間十五分となる。

日本のマイクロ・リーダーの最新機器は、スイッチ一つ押せば参照している箇所が直ちに複写されて出てきて、マイクロ・フィルムの利用に不便さは全くないが、インドで使用されているマイクロ・リーダーには複写の装置が付属してなく、自分の手で書き写さねばならず、マイクロ・フィルムを利用することはかなりの時間を要することとなる。

イギリスの新聞『タイムズ』には、年毎の索引が完備されており、索引から月日・頁・コラムを知り、容易に目的とする記事を検索することができるが、インドの新聞にはそのような索引はなく、全ての頁に目を通さねばならず、制限された利用時間では、更に多くの日数が必要となる。

四月から七月にかけて、デリーでは連日四十度を越す猛暑となるが、この時期を冷房が完備したネルー記念図書館の中で研究に従事することは、ここがデリーであることをも暫し忘れるほど別天地のような気持ちに浸ることがができる。しかし、デリーの数多くの場所で同時に冷房器具を使用することで、デリーの電気使用量が供給量を超過し、その結果数時間にわたって停電する事態に陥ることが度々あった。

一旦停電になると、時間の経過と共に館内の冷房効果が薄れていき、それまで実に快適であった椅子のクッションは、その周囲がレザー風の黒いビニールで被われていたことよって、返って蒸し暑さを感じさせ、不快なものへと変化し、読書する意欲は相当削がれてくる。

これが不運にもマイクロ・リーダーを利用していた時に停電に遭遇すると、その利用すら全く不可能となり、時間だけが空しく過ぎて行くこととなる。時には、全く利用できないまま、次の利用者と交替せねばならないことも起こりうる。

図書館内には小綺麗なカンティーンが備わっており、メニューこそ豊富ではないが、二ルピー(約二十円)程度で簡単な昼食を取ることができる。

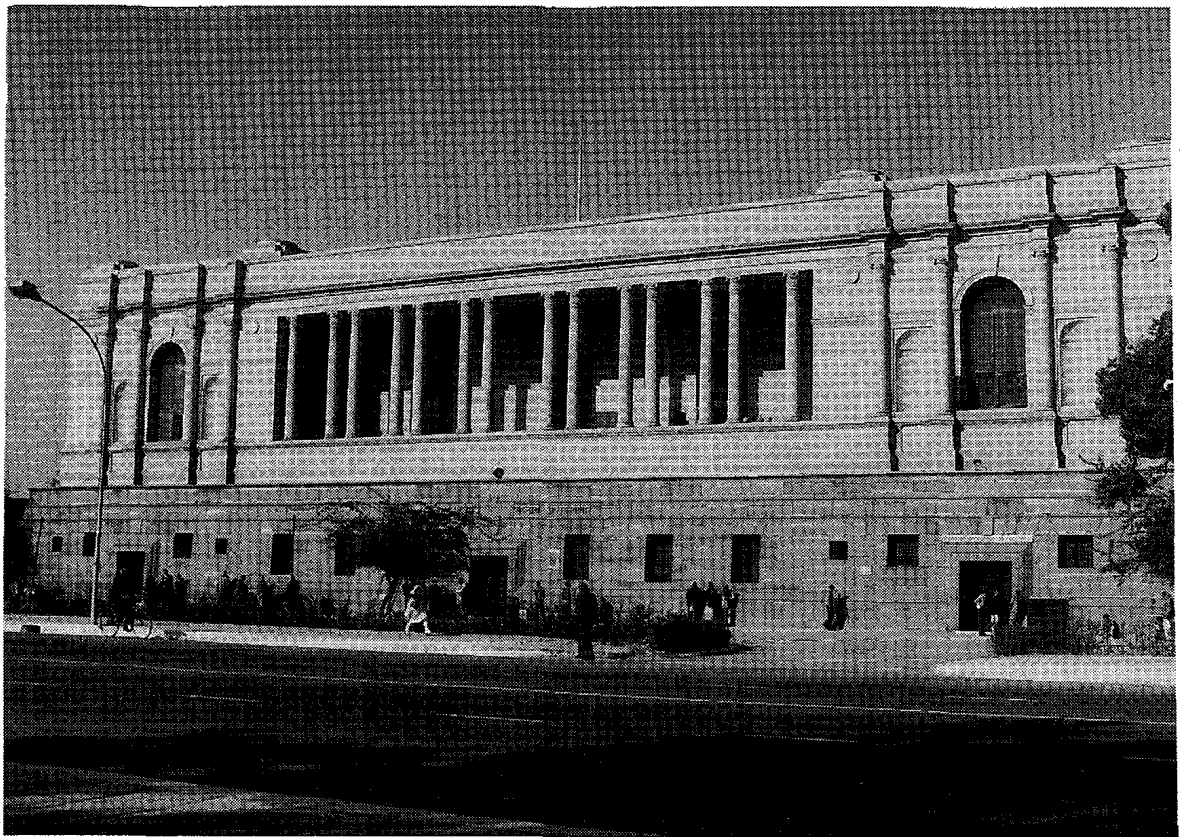
図書館は、日曜日と祝祭日とその休館日となっている。

ネルー記念図書館では、図書館自体は極めて近代化された設備を備えているが、図書館を取り巻くその他の環境が残念ながら図書館の近代化と歩調を一致させてはいない。マイクロ・フィルム化された新聞に索引がないこと、複写装置のないマイクロ・リーダーしか備えられていないこと、更に頻繁に起こる停電によってマイクロ・

リーダーが使用不可能となることなどは、最も問題とされるところであり、将来大いに改善されることを期待したい。

三 インド国立古文書館

バターチャリーヤ教授の指導の下では、軍事財政の小論文を扱い、八〇年一月より博士課程への進学が認められたが、軍事財政の論文作成のために、ニューデリーの中央に位置するインド国立古文書館(National Archives of India, Library, Janpath, New Delhi 110001)の利用手続きを七九年九月に行った。古文書館では、ネルー大学からの紹介状の他に日本大使館からの紹介状が要求され、文化担当の日本大使館員の方に願い出て紹介状を発行してもらい、それを提出した。私の古文書館利用の許可が下りたのは翌年一月のことであり、この審査に実に四カ月もの期間を要した。私以後、数人の日本人の研究者と修士課程への留学生達には、利用手続き上に何の障害もなく、容易に古文書館を利用することができるようになっていた。私以前は、幾人かの日本人研究者が古文書館の利用を拒否されていた事実を後に知った。最近では、再び古文書館の利用許可を得ることが困難になっ



インド国立古文書館

ていることを聞き及んでいる。その時の状況によって、かなりの相違がある模様である。従って、日本から古文書館を訪問して利用することは殆ど不可能であろうと思われる。

発行される利用券は、一カ月の期間しか許可されてなく、長期間利用の場合には月毎にその延長を行わねばならない。

古文書館の史料は全て閉架式であり、先ず数枚の紙に記された所蔵史料の中から自分の研究に関連する史料を選び出す。議事録(Proceedings)等の史料には年に四冊の索引(Index)があり、先ずこの索引を閲覧して個別の史料を探し出すことを、古文書館員より教えられる。その史料名と該当する年月とを史料請求用紙に記入して、現物が出てくるのを待つ。史料請求に対して、古文書館員が書庫から史料を取り出してくるのは、朝十時と午後二時の二回しかなく、二時を過ぎた史料請求の受け付けは翌日の扱いとなる。しかも史料が出てくるまでにはかなりの時間を要する。

インドの古文書は酸性紙でできているために、破損状態がひどく、殆ど全てが修理されているか、またはその過程にある。その修理には、日本の薄い和紙のような紙

で破損した紙の両面から糊付けする形でなされ、印刷された文字の判読が非常に困難になっている。また、元の紙の周囲に相当余白を取って糊付け修理されているために、本来はA4版程の大きさの書物が、A3版程の大きさのものとなり、その厚さも、五センチメートル程の書物であったものが十数センチメートル程の大部のものに変わり、読むためには木製の大きな見台を必要とし、極めて扱いにくい。

しかも、索引は写本のため、索引を読むこと自体がかなり困難である。

索引に記された史料には、各々A、B、Cの等級が付され、Aの等級の史料は全て保存され、Bの等級の史料は保存されているものとなないものとに分けられるが、その多くは保存されていない。Cの等級の史料は全て保存されていない。この等級は、編集に当たった人物によってなされており、研究者自身の目的や関心とは必ずしも一致していない。『軍事議事録』(Proceedings of Military Department)の索引を例に取ってみても、一九世紀末に、日本から二回に亘って日本の軍人が英領インド軍の調査のためにインドに派遣されていたことを知り、その史料を請求したが、何れも破棄された史料の中に含ま

れ、現在は残されていない。

索引から選り出された史料を請求する場合には、一日十件までの請求しか認められず、しかもこの史料に付された等級のことが判るまでは、十件全てが該当する史料の所蔵なしとの返事を受け取ることもままあった。

史料自体は、一八五〇年代以前のものが写本であるのに対して、それ以後のものは刊本となり読み易くなっていた。しかしこの方法を行っていると、索引を扱うこと自体で相当の時間を要し、現物の史料に接するのはそれから更に後のことになり、研究のテーマが極めて小さく短い時代でもない限り、誠に要領を得ない方法であると感じた。古文書館を利用し始めてかなり経過してから、一つ一つファイルされた個別の史料請求の他に、議事録は月毎に一冊 (Volume) にまとめられていることを知り、今度はそれを請求することにした。この方法であれば、索引を一々調べることなく直接史料に接することができ、しかも各頁の上段にはその頁の史料の題目が記されており、一枚一枚頁をめくれば、自分のテーマと関連する史料を見つけ出すことができた。

古文書館所蔵の史料は、貸し出しの制度が一切なく、史料収集は随分手間のかかる仕事となる。

古文書館には複写機の設備はあるが、自分の利用していた時には、まだインド式の極めて旧式のもものが主体であった。この機械で複写するには、本を開き、該当の頁を写真板に撮影し、その写真板に還元剤である銀の化合物を添付させると、文字の部分だけにその化合物が付着して黒色に変化し、白い紙をその上に置けば複写ができるという方法であり、一枚複写するのに相当時間を要した。但し、本の背表紙を押さえることもなく、史料を痛めないという意味では、日本の複写機よりも優れた一面も有していた。この複写機を使っていたために、古文書館で複写を申し込むと、僅か一枚でも複写ができるまでに三〜四カ月の月日を要し、頁一面に小さな数字が並んだ表などを複写することしか、その利用価値はなかった。ここで複写された史料には、裏面に一枚ずつ古文書館の印鑑が押され、その複写の権利が明記されていた。

自分の滞在中に、日本製の複写機が古文書館に一台導入され、最初は順調に動いていたが、その内にどこか具合が悪くなり故障してしまった。その時に、修理するアフター・サービスがまだ行き届いていないのか、あるいは故障した部品がインドにないのか、そのいずれの理由によるものか良く判らないが、かなり長い間動かさないま

まになっていた。ここにも、近代的な機械の導入、とりわけ外国製品の利用にはまだまだ問題の余地が残されていた。

史料の検索という点では、月毎に発行された一冊本を利用することが遙かに有効であるが、その史料に両面から薄い紙が糊付けされる修理が施されていたために、その史料から複写したものは細かい文字の判読が困難となった。複写には個別にファイルされた史料の方が適しており、史料によっては改めてファイルされたものを請求し直し、それを複写依頼する必要性も出てくる。

複写機による方法の他に、古文書館員に史料のタイピングを依頼する方法もあり、こちらはタイピング一枚当り一ルピー五十パイサ（約十五円）の料金で、三週間程度で出来上がった。ただし後で、タイピングされたものと、元の史料とを読み較べて、タイピングの誤りを訂正することが必要である。

長い史料はタイピングに依頼し、自分では短い史料を手書きで写した。但し、史料保存のために、万年筆の使用は一切禁じられ、鉛筆もしくはボールペンでの写しが厳しく要求されていた。

このように古文書館での史料収集は、表などの複雑な

ものは複写を依頼し、長文はタイピングに回し、短い史料は手書きで写すという三つの方法で分けて行った。

南のマドラスにある古文書館では、カメラを館内に持ち込んで、史料をマイクロ・フィルム化することが許可されたり、テープ・レコーダーを館内に持ち込み、史料を読みそれを録音し、帰宅後その録音されたテープを文字化することが許されたりして、同じインド国内の古文書館でも、史料収集に関する対応の方法にはかなりの相違がある。

デリーの古文書館では、アメリカの研究者が二人掛けの机の一方に自分の妻を座らせ、自分は専ら史料検索に当り、妻の方が研究者の指摘した史料の箇所を書き写すという作業を行っていたことを度々目撃した。デリーの古文書館では、いかに複写設備が悪く、他の複写方法に対して全く融通が利かないかを示す一例でもある。

古文書館には、ドイツ製のかなり旧式のマイクロ・リコーダーが二台備えられ、主にイギリスに所蔵されているインド総督やイギリスのインド担当相などの個人文書 (Private Papers) が、マイクロ・フィルムの形で所蔵されている。個人文書は、各個人の往復書簡や電報を年代順に集めたものであり、カーゾン (Marguess Curzon of

Kedleston 一八五九〜一九二五) 総督など二十世紀の史料は刊本となっているものもあるが、十九世紀のものは全て写本である。写本をマイクロ・リーダーで読むことは極めて困難であり、単語の不明部分の判読を幾度か高年の研究者に頼み、一緒に知恵を絞り合って、判読を行ったことがあった。

古文書館でのマイクロ・フィルムの利用者は少なく、希望すれば丸一日利用することが可能であるが、バルブの破損防止のため、一時間につき十分間マイクロ・リーダーを休ませることが要求されている。

古文書館では、朝九時から夜七時四五分までの利用時間中、凡そ二十名程の研究者が二人掛けの机に一人で座り、大きな見台の上に置かれた史料を前にして研究に従事していた。

冷暖房の設備はなく、夏は天井の大きな扇風機が回転し、涼し気な風を送っている。四十度を越える暑さでも、湿度はなく空気は乾燥しているために、扇風機さえあればそれ程苦にはならない。しかし一旦停電となると送風は止まり、座っていること自体かなりいたたまれない状態になってくる。

椅子は、通風の良いように、台座にビニール紐で、籐

の椅子に用いられている編み方が施されたものが備えられており、この素朴な椅子のほうがネルー図書館の一見豪華な椅子よりもむしろ、インドの気候に適したものであるように思われた。

停電の事態が起こると、研究者だけでなく古文書館の館員も仕事を休み、休憩時間として、カンティーンで紅茶を飲みながら談話を楽しんでいる。

カンティーンは、古文書館の横に添え付けられた粗末なものであり、メニューにも全く期待は持てないが、値段はニューデリーのどの店よりも安く、五十パイサ(約五円)で昼食を取ることができた。

古文書館の近くには、数軒のインド式の小さなレストランの他に、八四年にニューデリーで開催されたアジア競技大会に合わせてカニシカ・ホテルとアショーカ・ヤートリ・ニワースの二つの宿泊施設が建ち並び、主に外国人観光客に利用されているこれらの施設のレストラんで、二十〜三十ルピー(約二百〜三百円)を支払って、上等の食事を取ることが出来る。

古文書館は、一年の内では一月二六日の共和国記念日、三月中旬のホーリー祭、八月十五日の独立記念日、十月二日のマハトマ・ガンディー生誕記念日の四日だけがそ

の休館日となっている。

共和国記念日は、一九三〇年にマハトマ・ガンディーに指導された民族運動がこの日を独立の日と定めて、第二次非暴力的抵抗運動を開始したが、独立後一九五〇年の同日にインド共和国憲法が施行され、それを祝う日である。この日のパレードには、陸・海・空の三軍を始め、インドの各州からの代表やデリーの幾つかの学校の生徒達も参加し、一年最初の最も賑やかな祝日となる。古文書館はそのパレードの舞台となる大通りラージ・パトゥに面しており、前日と前々日に行われるその予行演習に身近に接することができる。一九八二年は、インド空軍の五十周年に相当し、パレードの日に備えて連日わたってジェット戦闘機の超低空の訓練飛行が繰り広げられ、その猛烈な爆音は飛行直下の古文書館の館内にも響き渡り、大いに驚かされた。

インドには、ホーリー祭の他にも数多くの祭日があるが、春の到来を祝うホーリー祭の日には人々が誰彼となく色粉や色水をかけ合い、時として水の入った小さな風船が道行く人につけられる光景も見受けられ、そのためにこの日の古文書館は休館となる。

独立記念日とガンディー生誕記念日の二つの祝日は、

市民のための特別の催しもなく、静かな休日となる。

一般の図書館が、日曜日と祝祭日を休館日としているのに対して、古文書館では日曜日と、前に説明した四つ以外の祝祭日も開館し、二人の館員が閲覧者のために交替で勤務している。但し、この日の利用は新たな史料請求ができず、前日に利用した史料を当日用に予約・保存しておき、その閲覧を行うものである。このことを予め知っている、史料の閲覧も多少速くなってくる。この日の利用は、夕方四時までとなっている。

インド国立古文書館は、ランズダウン (Marquess of Lansdowne 一八四五〜一九二七) 総督の時代の一八九一年に設立され、現在二十万冊の蔵書を所蔵しているが、建物・内部設備・閲覧方法全てが古く、古文書館の裏に鉄筋で十階に近い新館の建設が八三年より開始され、三年後の完成を目指していたが、八八年三月の段階では未だ建設中とのことであった。ネルー記念図書館の設備に劣らない近代的な古文書館へと変貌することであろうが、日曜日・祝祭日の閲覧だけはそのままの形で残しておいてもらいたいものである。

四 その他の図書館

(一) 中央官庁図書館

古文書館に請求した史料が、書庫から出てくるまでにまだ時間がある場合には、古文書館の西隣の中央官庁図書館 (Central Secretariat Library, G Block, Shastri Bhavan, New Delhi 110001) を利用する方法がある。

中央官庁図書館は、ランズダウン総督時代の一八九〇年に設立され、七十万冊に及ぶ蔵書がある。入館には何の手續きも不要であり、誰でも自由に出入りができる。蔵書は全館開架式であり、図書の利用は極めて便利である。『イギリス議会議文書』(British Parliamentary Papers) は欠号している部分がかなりあるとはいえ、開架式で直接見られることができるのは有難い。

朝九時から夕方六時までの利用時間には、官公庁に勤務している人達と一般市民とが二百人程利用している。

天井には扇風機が付き、冷暖房の設備はない。閲覧用机は六人用であり、椅子は古文書館と同じくビニール編み紐式のものである。

複写などに関しても、規制は殆ど全くないが、歴史学の一次史料となる文献の数が少ないのが惜しまれる。

(二) サプルー・ハウス

サプルー・ハウス (Indian Council of World Affairs, Library: Sapru House, Barakhamba Road, New Delhi 110001) は、ネルー元首相が、一九四三年設立のインド世界事情協議会の初代長官であった法律・政治家サプルー (Tej Bahadur Sapru 一八七五〜一九四九) の名に因み、ニューデリーの中心に五五年に建設したものであり、国際関係研究の専門機関とその付属図書館として、十三万冊の蔵書を保有する。

サプルー・ハウスは、後のネルー大学国際関係学部へとその組織が発展した。

ネルー大学の学生に対しては、この図書館から大学図書館と同じく五冊まで二週間の図書貸し出しが行われている。

朝九時から夜七時半まで、学生約二百人位が三人掛けの机に座って勉強している。

学生寮の完備したネルー大学からは、スクール・バスがネルー記念図書館、古文書館に立ち寄って、サプルー・ハウスへと進む五十分程の道を朝・昼・夜の一日三回往復しており、学生たちの多くはこのバスを利用して各々の図書館に通っている。

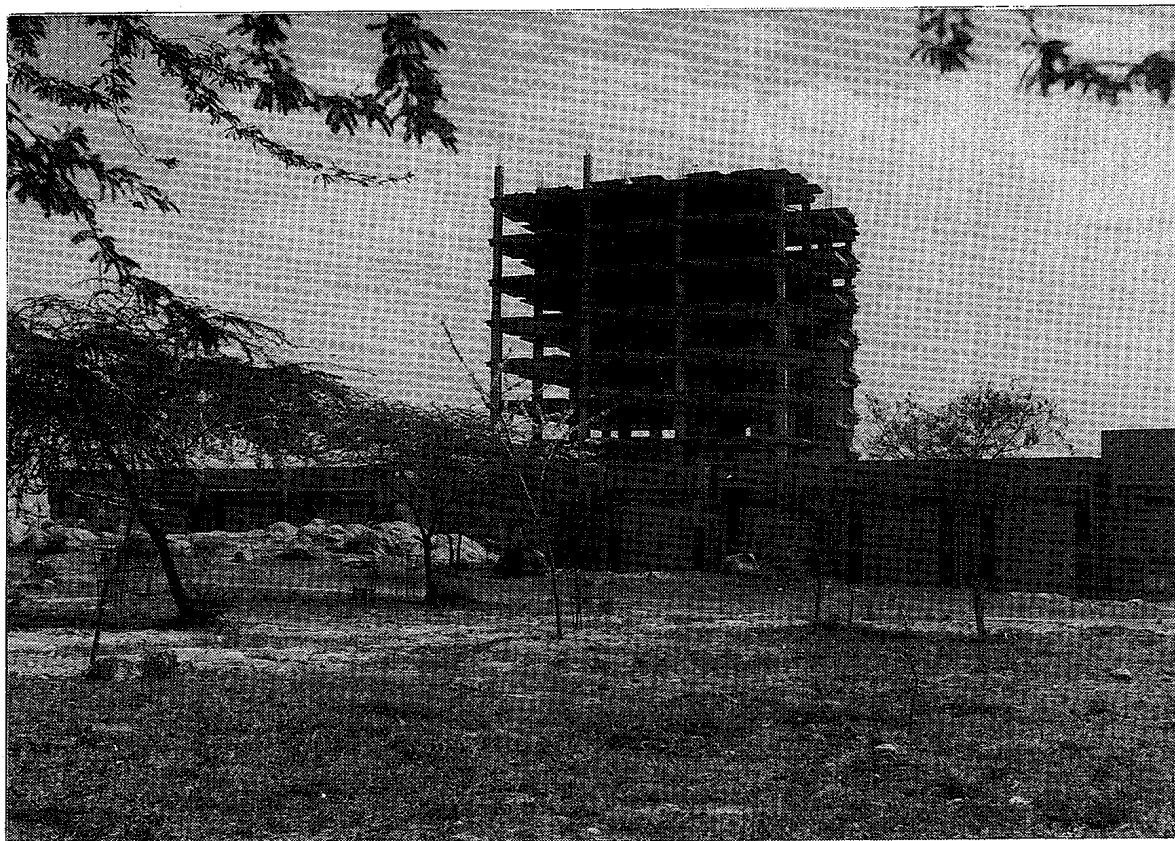


サブルー・ハウス

(三) ジャワールハルラール・ネルー大学図書館

ネルー大学 (Jawaharlal Nehru University, Library, New Mehrauli Road, New Delhi 110067) は、一九六九年にインディラ・ガンディー元首相によってニューデリーの南端に設立された国際的な視野を備えた新設の国立大学である。八〇年に丘陵の上に新築された、社会科学部・生命科学部・環境科学部・コンピューター組織科学部のあるアップ・キャンパス、最初に建設され、他学部がアップ・キャンパスに移転した後、現在は国際関係学部と言語学部の施設となっているダウン・キャンパスとに分かれている。そのいずれにも図書館が設立され、アップ・キャンパスの図書館が本館となっている。両キャンパスの図書館を合わせた蔵書数は、三十一万冊である。ネルー大学の特色は、学部のない大学院大学(言語学部のみ学部と大学院修士課程との一貫教育)であり、僅か二千三百人の学生数しかないことを考えれば、この蔵書数はかなり恵まれたものといえるであろう。

所蔵図書の中で特色あるものは、ダウン・キャンパス内に図書館とは別の場所に、P・C・ジョーシー(Puran Chander Joshi 一九〇七〜八〇)文庫が収められていることである。インド共産党(CPI)の創設者で、その



ジャワ-ハルラール・ネルー大学図書館 本館
(アップ・キャンパス)

総書記を務めたジョーシーはその晩年ネルー大学特別研究員となっていたが、没後彼の膨大な蔵書をネルー大学が一括購入した。その蔵書の中には、共産党を始め、インドの民族運動に関する貴重書が数多く含まれている。

その他に、ダウン・キャンパスの言語学部には日本語学科があり、日本語の図書が数百冊程収蔵されているが、八四年当時ではまだ蔵書カードを作成中の段階であった。

また、創価学会代表者のインド訪問を機に、創価学会関係の図書約百冊がネルー大学図書館に寄贈され、日本語の蔵書に加えられている。

五 おわりに

ニューデリーで自分が良く利用した五つの図書館について記してきたが、いずれの図書館でも近代化を目指してはいるものの、全ての状況がそれと一体となって進められておらず、特に様々な電気機器の使用は停電によって全く役立たずのものになるという点で一致している。

複写機に関しては、インドの複写機メーカーと日本企業との技術提携が近年行われ、小西六写真工業(一九八〇)に続いて、東芝、シャープ(一九八八)が新たに加

わり、インド国内での近代的な複写機の普及は近い将来
飛躍的に向上し、部品の手も容易になるだろうと見込
まれている。

ニューデリーの図書館の中で、その利用が最も困難で
あるのはインド国立古文書館であるが、新館の完成と同
時に、内部設備の近代化と閲覧の合理化とが将来一層推
進されることを強く望みたい。

附 日本で見られるデリーの図書館蔵書目録

HUL: 一橋大学附属図書館

IAA: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

IDE: アジア経済研究所

IOC: 東京大学東洋文化研究所

KUL: 慶應義塾大学三田情報センター

NDL: 国立国会図書館

NOL: 国立国会図書館支部東洋文庫

① National Archives of India

*Annual Report of the National Archives of India
for the year 1954-1955, 1958, New Delhi, 1956-1960.*
3 Vols., Delhi, Manager of Publications, Govt. of
India. (IOC)

*Descriptive List of Mutiny Papers in the National
Archives of India, Bhopal. (Private Collection)*

ニューデリーにおける図書館の情況

vol. I, 1960.
vol. II, 1963.
vol. III, 1971.
vol. IV, 1973.

*Fort William - India House correspondence and
other contemporary papers relating thereto, Manager
of Publications, Govt. of India.*

vol. 1: 1748-1756, ed. by K. K. Datta, 1958.

(HUL, IOC)

vol. 2: 1757-1759, ed. by H. H. Sinha, 1957. (IOC)

vol. 5: 1767-1769, ed. by N. K. Sinha, 1949. (IOC)

vol. 6: 1770-1772, ed. by B. Prasad, 1960. (IOC)

vol. 9: 1782-1785, ed. by B. A. Salefore, 1959. (IOC)

vol. 10: 1786-1788, ed. by R. Sinha, 1972. (IOC)

vol. 13: 1796-1780, ed. by P. C. Gupta, 1955. (IOC)

vol. 15: 1782-1786, ed. by C. H. Phillips, 1963. (IOC)

vol. 17: 1792-1795, ed. by Y. J. Taraporewala, 1955.

(IOC)

*Index to the Foreign and Political Department
records, vol. 1, Delhi, Manager of Publications, Govt.
of India, 1957. (IOC)*

② Indian Council of World Affairs Library

*Documentation on Asia, vol. 1, 1960, New Delhi,
Allied Publications, 1963. (NDL)*

- vol. 3, 1962, New Delhi, Allied Publications, 1969.
(HUL)
- Documents on Asian Affairs; selected bibliography*,
New Delhi, 1959-, 2 vols. (Bibliographical series)
(IDE)
- Documents on Indian Affairs*, London, Asia Publishing
House, c1965-. ed. by Girja Kumar & V.K. Arora.
(IDE)
- India-America Conference, New Delhi, 1949, Indian-
American relations; Proceedings*, New Delhi,
Indian Council of World Affairs, [1950].
(IAA, IDE)
- Select articles on current affairs*, New Delhi, Indian
Council of World Affairs.
vol. 4 : 1959. (IDE)
vol. 5 : 1960. (IDE)
vol. 6 : 1961. (IDE, NDL)
vol. 7 : 1962, New Delhi, Allied Publications, 1965.
(HUL, IDE)
vol. 9 : 1964. (IDE)
vol. 10 : 1965, New Delhi, Allied Publications, 1969.
(HUL, IDE)
- ③ Parliament Library, Parliament House, New Delhi
110001. (一九二一年設立'藏書數二十万冊)
- Catalogue of Books in the Parliament Library*, New
Delhi, Parliament Secretariat, 1953-. (NDL)
- Pt. 1 : Author catalogue, brought upto 31st Oct. 1951.
Pt. 2 : Subject catalogue, brought upto 31st Oct. 1951.
Pt. 3 : Author catalogue, brought upto 31st Oct. 1951.
- ④ Delhi Public Library, Mukerjee Marg, Delhi 110006.
(一九五一年 UNESCO 共同設立'藏書數八十万冊)
Delhi Public Library and what it offers to you,
Delhi, Delhi Library Board, [n.d.]. (NDL)
Delhi Public Library, Report, Delhi, Delhi Library
Board. (NDL)
- Frank M. Gardner, *The Delhi Public Library; an
evaluation report*, Paris, UNESCO, 1957. (NDL)
- ⑤ National Museum, Janpath, New Delhi 110011. (一九
四九年設立)
*National Museum, New Delhi: scripts from Indian
collections. Descriptive catalogue*, New Delhi, 1964.
(NOL)
- ⑥ Libraries in Delhi
N. K. Goil ed., *Directory of Libraries and who's
who in library profession in Delhi*, Delhi Library
Association, 1964. (KUL)